
復讐するは我にあり 夜の海で

があわいこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

復讐するは我にあり 夜の海で

【Zマーク】

Z6846P

【作者名】

があわいこ

【あらすじ】

BC島で神父をしていたアラン。彼はなぜ再会した旧友ジョージ浅倉にわざと撃たれるような運命を選んだのだろうか？

婚約者が死んでしまったその年のクリスマスにアランは牧師から神父へと改宗した。

生涯を共にできる人はソフィア以外にいないと思つたからだ。もう一生誰とも結婚を考えることはないだろつ。ならばいつそのこと生涯を神にささげようと決心したのだ。

実はアランはもともと神父になろうと修業を重ねていた。十年も前のことだが、突然遊び友達だったジョージが死んだと聞かされてからというものアランの荒れようといったらそれはひどいもので、とうとう未成年者ながら逮捕されてしまったのだ。そのとき、身元引受けをかつて出てくれたのが神父だつた。アランは教会の修道僧として将来の神父を目指し、教会に住み込みで働き始めた。

そんなある日の夜も更けた頃、アランはひつそく一本の灯かりを頼りに礼拝堂の掃除をしていた。

本来なら昼の間にやつておくのだが、その日は神父とともにブドウの収穫を手伝いに行つていてできなかつたのだ。すると、そつと礼拝堂のドアが開いて誰かが入つてきた。

「どなたかね？」

アランはちょっとだけ神父の真似をして言つてみた。するとその人影は懲悔室へと音もなく入つていつた。

アランは神父へ連絡しようかと思つたが、好奇心から自分がそこへ入つてしまつた。

「神父さま。」

その声は聞き覚えのある少女だった。

「ソフィア、ソフィアじゃないか。どうしたんだ？今頃。」驚いたソフィアは顔を上げて仕切りの向こうにいるアランの顔を見つめた。

「あ、アラン・・・？」

逃げ出すかと思ったソフィアは意外にもホッとしたような顔で金網の向こうのアランに話し始めた。

「私、ギャラクターを抜け出したいの。でも一人では何もできない。パパもママもギャラクターだから、私だけが抜け出すことなんてできなーいわ。」

そんなソフィアにアランは自分の気持ちがしつかりしているのなら当たつて砕ける、上司にあたる女隊長さんとやらに直訴してみたらどうだ、きっと神様が守ってくださると言つて励ましたのだった。

それからといふものソフィアは夜になると毎日のようにアランの元へ「懺悔」にやって来た。

それに気づいた神父が問いただすと、アランはこれまでのいきせつを話し、ソフィアの力になつてやりたいのだと熱く語った。神父はアランとソフィアが愛し合つており、すでに男女の関係になつていることを察知した。

そして、どうしてもソフィアを守りたいのなら神父ではなく牧師になつて彼女と結婚するべきだとアドバイスしたのだった。

季節風と近くを流れる寒流のおかげで狭い島ながらそこだけは夏でも冷たい風が吹いて島民の間で避暑地として使われていた海岸。そこは10年近く前、ジョージが両親とともに銃殺されたと聞いたところだ。

アランはそこにソフィアと一緒に暮らすための小さな牧師館を建てようとしていた。

自分がここにいたらジョージがひょっこりと遅つて来るような気がしたからだ。

小さいが誰でも訪ねて来られる明るい教会を作りたい。

貧しい家の子供たちを集めて文字を教え、聖書や他の本を読めるようにしてやりたい。

そうアランは将来の夢をソフィアに語った。

ソフィアもアランの言つ通りに女隊長にギャラクターを抜けたいと直訴していた。

恋する女に怖いものはない。

ソフィアの申し出に女隊長はある条件を出してきた。

そして、ソフィアはためらわずにそれを承諾したのだつた。

「本当に大丈夫なのか？」

心配するアランにソフィアは微笑んで応えた。

「ええ。女隊長が約束してくれたわ。これが最後の仕事だつて。私はお母さんに教えてもらつた技があるの。だれにも負けやしないわ。」

「そうか。頑張るんだよ、ソフィア。」

アランはソフィアの小さな肩を抱いた。

ソフィアがその最後だという仕事に出かける前の日に一人は出来上がつたばかりの小さな『自分たちの』教会で婚約式を行なつた。これからは一人でともに分かち合い、生きていくのだ。
誰が見てもお似合いの一人だつた。

ソフィアが仕事から帰つてきたらすぐに結婚しよう。

そしてこれから一人で幸せになろう。一人の未来はまさにバラ色に輝いて見えた。

「アラン、アラン・フュリーーさんですね。」

婚約式の日から一週間ほどたったある土曜日の夕方、明日の礼拝の準備をしていいるアランの元を背の高い女性が訪れた。

金髪の長い髪を耳の横で束ねている。

「はい、アランは私ですが。」

「2号……いえ、ソフィア・モンレールさんのことでお話が……」

「……！」

アランのいやな予感は的中した。

ソフィアが死んだと事務的な口調で告げる女にアランはそんなことは信じないと言い張ることしかできなかつた。

だが、さらにその女は冷たく言い放つた。

「私はちゃんと見ていたのですよ。ソフィアは私どもの組織から抜けたがつていまして、これが最後の仕事になるはずでした。科学忍者隊のコンドルのジョーを捕まえてしまえば彼女は自由の身。あなたと結婚するのを楽しみにしていましたのにねえ。」

「科学忍者隊？ コンドルのジョー？」

「そうです。ソフィアはコンドルのジョーを捕まえようとして逆に捕まつたのです。『私を許して逃がして欲しい』と懇願する彼女の胸めがけてジョーは羽根手裏剣を撃ち込んだのです。」

「なんだって？！」

「血も涙もない冷酷な人間ですわ。コンドルのジョーは。」

女は耳の下で髪を束ねて星型の飾りに手をやりながらさつ吐き捨てるように言った。

「もついい。帰ってくれ。」

ギャラクターの女隊長は、アランの言葉を聞くと冷たい微笑を浮かべ

「わかりました。では帰させていただきますわ。」

そういふと同時につぶやいて牧師館から去つていった。

「ソフィア・・・」

人間といふのはあまりにも悲しいと涙が出ないとこがまさにアランがそうだった。

ただ、「ソフィアは科学忍者隊のコンドルのジャーに殺された・・・」
そう何度もつぶやくのだった。

その次の日、アランの小さな教会では日曜礼拝が行われなかつた。
そしてその夜、教会から海へと向かつて歩く人影があつた。
アランの身体は胸まで海につかり、大きな波がアランを呑み込みそ
うになる。

もうすぐ脚が立なくなるだろ？

「・・・アーネン・・・」

どこからか自分を呼ぶ声がある。

もしかして・・ジョージ・・?・お前なのか・・?

その時アランはガシッと強い力で抱きかかえられた。

「アラン、何をしているんだ？」

「し、神父さま・・!？」

朦朧とした意識がハツと戻つた。

「ソフィアが亡くなつたと聞いてお悔みを言おうと訪ねてみたら、
今日の日曜礼拝がなかつたというじゃないか。それで心配になつて
探しに来たのだよ。」

懸命に走つてきたのだろう、神父は荒い息づかいの中で休み休みそ

「私の名前を呼んでいたのは神父をまだったのですね。」

「ああ。間に合つてよかつた。」

ポンと神父に肩をたたかれて、アランははじめて声をあげて泣いた。

「うう・・うわーーっ・・・」

頭一つも神父より大きなアランが小さな子供のよつに神父にすがりついて嗚咽を漏らした。

暗い夜の海で一人はずぶぬれだた。

「そうだ。思いつきり泣ぐがいい、アラン。ここなら波の音がすべてを消し去ってくれる。」

神父はアランを抱きとめ、その背中をなだめるように優しく叩いた。「自らの命を絶つといつ」とは神に逆らうことだ。もし死にたいのなら・・・

「死にたいなら・・・?」

「・・殺してもうつしかない・・・。」

「殺して?」

アランは神父の意外な言葉に驚いてほの暗い月明かりの中でその顔を見なおした。

神父はふつと息を吐くと沖合にを見つめながら続ける。

「私だつて人間だ。死にたいと思つたこともある。誰かライフルで私を撃つてくれないかとさえ思うほどにね。」

神父のような人でもそんな風に思うことがあるのか・・。それとも自分を励まそうとしてこんな話を・・?」

神父はアランの両肩に手をやると

「だが、君はまだやることがある。子供たちが君に勉強を教わりたいと待つているじゃないか?」

そう言いながらアランの身体を揺さぶつた。

そして今度はアランの手を取り片方の手でその手の甲を軽く叩きながら

「君は新約聖書、ローマ人への手紙、第12章第19節を知っているね。」

そう問い合わせてきた。

「はい、神父さま。」

「言つて『ごらん。』

「あ・・愛する者よ、自ら復讐するな、ただ神の怒りに任せまつれ。^{しる}録して『主いい給つ。復讐するは我にあり、我これを報いん』・・。

」

神父はもう一度、アランの顔を見た。

「教会学校の子供たちはわかりやすく言つてやらねばならぬよ。さて、なんと言つ?」

アランも神父の顔をじっと見つめて言つた。

「愛する者たちよ、自分で復讐しないで、むしろ、神の怒りに任せなさい。なぜならば、「主が言われる。復讐は、わたしのすることである、わたし自身が報復する」と書いているからである。」

「うん、うん・・・。」

神父は眉を寄せ、眼を細めると何度もうなづいた。

その後、二人は無言で海からあがると、牧師館へと消えていった。

THE END

(後書き)

読んでくださりありがとうございました。ガッチャマンのファンの方
は他にもあります。

シリーズ一覧よりご覧いただけます。

があわいこのページ

<http://mypage.syosetu.com/4032>

2 /

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6846p/>

復讐するは我にあり 夜の海で

2010年12月30日22時48分発行